Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2007, Special Issue No.3, 83-86

論 文

僻地複式学級における図画工作科の指導

池 川　直

Guidance of Arts and Crafts Class for Double Grade s in Remote Place

IKEGAWA　Sunao

平成10年に文部省「学習指導要領」が改訂され（小学校、中学校とも平成14年度から実施）「生きる力」の育成、学習内容の3割削減、「総合的な学習の時間」の新設等により、改訂の方針が出された。図画工作科でも改訂の基本的方針としては、豊かな情操を養う指導が、いっそう充実しておこなわれるようにすること。基礎となる資質・能力を一層育てられるようにすること。内容をまとめて示し、それらを選択したり一体的に扱ったりできるようにする。鑑賞の充実を図る。（地域の美術館の活用も図るよう配慮する。）この 4 つの基本的改善方針から、目標と内容を2学年まとめて示すこと。材料等をもとにして楽しく造形活動を行う内容を、高学年でも指導する。絵に表すことや立体に表すこと、つくりたいものをつくることの内容を一層関連付けたり一体的に扱えるようにすること。工作に充てる授業時数を十分確保すること。この 3 点が改善の具体的事項とされた。これら図画工作の授業は、表現及び鑑賞の活動を通して、つくり出す喜びを味わうようにするとともに造形的な創造活動の基礎的な能力を育て、豊かな情操を養うことを教科の目標とかかげていることから、教える側と教えられる側、生徒、児童相互のかかわりあいの深い教科といえよう。さらに 1、2 学年、3、4学年、5、6学年と 2 学年共通の学習の目標や内容は、他の教科と異なる意味の問題解決学習として、異学年共同学習である複式学級において教える側の指導法が試される教科ともいえる。この複式学級ならではの教材開発、教科指導についての中間報告書としてまとめてみることにした。

1　自然環境と美術教育

離島僻地に共通している環境として豊富な自然が身近にあるということである。図画工作1ー4年生造形遊びにおいては材料に働きかけて創造する上で、さらに自然の中で行われることは意義深い。例えば小学校1,2年上の題材「どんどんならべて」では、身の回りにあるものをいろいろな場所に並べる活動である。「材料集め」、「並べる場所見つけ」、「並べ

方」、「ともだちの並べ方の工夫した点、苦労した点などへの気付き」が題材のねらいであり、学校の置かれている環境によって、展開は異なってくる。17 年度に調査した鹿児島県瀬戸内町、奄美本島北部、加計呂間島に位置する瀬戸内町立俵小学校（児童数10名　男子6名、女子 4 名）の 1 2 年生5名（1 年生　男子 1 名、女子1名、2 年生　男子 2 名、女子 1 名）の図画工作授業における題材「どんどんならべて」は離島僻地ならではの実践例として、都市部の学校がうらやましく思えるような内容であった。それは、学校の校庭から公道をはさんですぐのところに白亜の砂浜が広がっており、様々な種類の貝殻、珊瑚、流木がそこにあり、それらをもとにして並べる活動が展開した。材料が足りなくなると 1 2 年生2人一組で車に注意しながら砂浜まで採りに行き、また戻って活動が再開された。美術教育では完成された作品だけが想像的活動ではない。材料が何に必要なのか、自然にあるものの中から自ら選択したり、他者からのことばの中や活動から触発されて発見したり、材料採取する過程の中で想像力は磨かれていく。その過程が大変重要であり、異学年一組の活動は、同学年同士の活動とは違いまさに兄弟同士の会話や仕種からまた違ったものを発見する利点があるように思えた。様々な種類の貝殻、珊瑚、流木を協力して並べながら、最後には「海の大タコ」が完成した。材料が身近にありいつでも材料調達が可能なこと、自然の環境に触発されて子ども同士で設定したテーマで最後まで楽しく活動できたこと、異学年の思いやりと尊敬する気持ちを持ちながら、互いに触発されて活動ができたこと、この自然環境が美術教育に与える効果を感じさせる授業であったことが、印象に残る。

「どんどんならべて」海岸で採取してきた貝殻を並べる児童

材料が足りなくなり採取している児童と教師

さらに、同校の他実践「プカプカランド」（註 1）にも学校の環境を活用した活動も興味深い。一般的には最後に仕上がった船を学校のプールに浮かべて楽しく浮かべて遊ぶのであるが、ここの場合には、内海の砂浜の海岸を活かして海に浮かべて遊ぶ。大自然を背景に自らがつくった小さいながらの船を浮かべることにより、なんともいえない充実感を味わう

ことができる。また、波に揺られたり、風により浮く材料や構造を間違えるとそれを備えていない船は沈む。子ども達はさらに工夫や改良を加え長く浮いている船をつくろうとすることに発展していくことが考えられる。浮力に優れることと造形的なものとは違いはあるが、よりよい材料を選び、構造を工夫することは造形能力を刺激すると考える。

2　地域と美術教育

学校と地域のかかわり合いは、都市部に行くに連れ希薄になっていくといってよい。大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件以来、多くの小学校では常時警備員を配置するようになった。学校における校外学習が盛んに行われている実情からすると、校外活動の最中同様のことが起きるかと思うと、どこまで責任を持てば良いのか見当もつかない。僻地学校においては、ある意味この部分が学校周辺の住民であり、保護者が大切な役目を果たしている。

前述した瀬戸内町立俵小学校では、瀬相、俵、三浦、知之浦、武名の5つの集落が学校区である。現在のところ瀬相、俵地区の2地区からそれぞれ5名が通ってきている。学校周辺が俵地区といい中学校と、民家十数軒、教員宿舎がある集落である。小学校の前の公道をはさんだところにそれらの集落があり、彼等は時折学校を訪ねてくるという。ちょうど来校した当日もある方が、小さな子をあやしながら児童の活動の場面をニコニコとした表情で見ていた。活動していた児童の中の母親であろう。その児童はややはずかしそうな表情で活動していたが、時折母親の方につかっている材料を自慢気に示しては何となくうれしそうに活動を続けた。校庭や浜辺での活動であるからこそこのような光景がみられるのであり、教員と親の2者から見守られ、表現の保証を得られているといった安堵感から一層の豊かな表現力が展開されたことを感じた。都市部小学校の環境の中では、見られない光景である。

3　図画工作授業における複式学習

複式学級における指導形態には、直接指導と間接指導があり、異学年それぞれの学年課題をつかみ、解決しながら相互に授業が展開されていく。その間教師による「わたり」(註2)や「ずらし」(註 3)といった教師の上下学年の間の動きの配慮の仕方や指導法が焦点となる。図画工作授業においては、上下学年が同じ題材を扱うことから特にその目標は概ね同じであるが、特に低学年での複式指導においては、入学当初の児童と経験を積んだ2年生の児童とはおのずと道具や教材の扱い方の学習目標が加味されなければならない。また、上の学年は2年目の単元として行われることから、さらに独創的な表現や技術的な面でも低学年とは異なった学習目標を具体的に示す必要がある。このことは次年度にさらに踏み込み、学年別目標を細かく設定した資料で実践を行っていただき、複式学級ならではの図画

工作授業のあり方を探ってみたいと考えている。

まとめ

複式学級での図画工作授業は、上下学年で同じ題材を扱うことが多い。現在鹿児島県全域で使用されている教科書（日文）は1 2上、下、3 4上、下、5 6上、下の6冊に別けられており、すべての複式学級を調査した訳ではないがそのまま上下を隔年で使用しているところが多いのではないであろうか。内訳を見てみると下巻が上巻の発展的題材であることから特に複式学級にこれをそのまま履修させることは有効と考えることができる。さらに地域の特性を活かした図画工作授業の必要性、離島、僻地における独特な教材づくりも各学校の実情の中でやられている。さらにこの点を調査することも今後の課題として取り組みたいと考えているところである。連携大学の琉球大学吉田悦治助教授の離島僻地小学校での実践授業報告を受けて、次年度は実践授業への取り組みと共同授業研究を検討してみたいと考えている。

註1 瀬戸内町立俵小学校 河野由美教諭による実践授業

註2 学年の間を「わたり歩く」教師の動きのことをあらわす。「わたり」の目的は、その学年に直接指導を行うためで、子どもが次の間接指導時の学習の進め方を理解し、学習が間断なく一貫した流れで展開できるように配慮する。「わたり」の要領は、指導過程における学年別指導事項の配慮の仕方やその指導方法によって決まる。（鹿児島県教育委員会指導書抜粋）

註3 2個学年を交互にわたり歩いて、直接指導と間接指導の内容を充実させ、学習活動を無理なく効果的に行うようにするには、どうしても指導段階を学年別にずらし、組み合わせることが必要になる。この組み合わせが「ずらし」である。間接指導の際の子ども自身による学習が充実するように十分に工夫する。部分的に「ずらし」を適用して習熟の程度に応じた指導にあたる工夫も必要である。（鹿児島県教育委員会指導書抜粋）